

21世紀アメリカ演劇受賞作品における 多様性と寛容性の傾向

松本 美千代

Michiyo MATSUMOTO. Trends of Diversity and Reconciliation in 21st Century Broadway Award-Winning Productions. *Studies in International Relations*. Vol.43. July 2023. pp.11-23.

The award-winning American plays are representative symbols of their respective eras. Not only are Broadway productions of the finest productions, including revivals, that have been well-received in regional and small-theater productions and have achieved box-office success, but their narrative topics, staging, and casting methods also reflect the social conditions of the times in which they were produced. This paper will analyze the characteristics and trends of award-winning Broadway productions in the 21st century, from 2001 to 2022, in terms of narrative content, writers, and production methods. In the process of analysis, it becomes clear that there are several specific diversity-accepting tendencies in award-winning productions: race, ethnicity, gender, economic disparity, war, suicide and drug addiction, the Internet society, loneliness and the search for identity, and so forth. In recent years, influenced by the spread of the pandemic that resulted in long-term theater closures, Black Lives Matter (BLM), gender, ethnicity, LGBTQ, immigrants, disability, and #MeToo, the rise of conservative and other related themes and visual representations have become prominent. As has always been the case, award-winning productions function as a forum for the representation of American social and cultural history in the 21st century.

キーワード： ブロードウェイ ピューリッツァー賞 トニー賞 多様性 アフリカ系アメリカ人

序論

アメリカ演劇の受賞作品はそれぞれの時代を象徴する珠玉の作品である。ブロードウェイで上演される作品は、リバイバルも含め、地方公演や小劇場公演で好評を博し、興行的な成功を収めることができた極限られた秀逸な作品である上に、その物語のトピックや演出・キャスティング方法には、その時代の社会情勢が色濃く反映されている。本論では、2001年から2022年までの21世紀におけるブロードウェイの受賞作品における特徴と傾向について、物語の内容、作家、演出方法などの面から分析する。分析の過程において受賞作品には多様で複雑な社会を象徴する傾向—人種、民族、ジェンダー、経済格差、戦争、自殺や薬物中毒、ネット社会、孤独やアイデンティティの模索など—が存在することが明らかになる。近年、長期的な劇場閉鎖をもたらした感染症の広がり

を受け、BLMや#MeTooなどの運動が活発になる時代背景と呼応し、アフリカ系アメリカ人やジェンダー、エスニシティに関するテーマや視覚表現が顕著になっている。アメリカ演劇受賞作品はつねにそうであったように21世紀アメリカの社会と文化の歴史を映し出す場として機能している。

21世紀のブロードウェイ劇場は新時代を映し出す鏡として数々の多様な価値観を扱う作品を誕生させてきた。2001年の同時多発テロ事件で幕開けして以来、アメリカ大統領は4名就任し、テロとの戦いや国内テロ活動、2003年のイラク侵攻、2005年のハリケーン・カトリナによる自然災害、教育機関や一般市民を巻きこむ銃の乱射事件の多発、2008年には世界金融危機に発展したリーマン・ショックに直面した。2009年には米国史上初の黒人のオバマ大統領が就任し、人種を含む平等性への期待が高まり、2015年には同性婚を合法とする最高裁の判断が下された。しかし2017年白人労働

者の支持を受けた共和党トランプ大統領が就任し、2020年に新型コロナウイルス感染症のパンデミックの混乱の中、2021年には多様性への寛容さに立脚するバイデン大統領が勝利し、現在でも国を二分する移民問題や女性の人口妊娠中絶の是非などの包摂性をめぐる文化的論争が続いている。

各年授与されるピューリッツアー賞とトニー賞受賞作品は、興行主と観客の需要を勝ち取った米国社会の諸相を象徴する変化の記録と言える。2020年2月から2021年夏のシーズンは、感染症拡大によりブロードウェイ劇場は初めて長期閉鎖を余儀なくされ、2021年9月より徐々に再開した。こうした劇的情勢変化の中、人種、ジェンダー、LGBTQ、移民、障害、アフリカ系アメリカ人の差別撤廃運動であるブラック・ライブズ・マター（BLM）、女性の人権回復に関する運動である#MeToo、保守派の台頭など、受賞作品はアメリカの現状を反映している。本論では多様性と寛容性を取り入れる傾向にある21世紀アメリカ演劇の受賞作品について考察する。

1. 近年の受賞傾向と非白人の舞台における活躍

「トニー賞最優秀ミュージカル賞を受賞すると、上演の持続可能性は3倍になる」(Warne, 3)と言われる。上演を左右するピューリッツアー賞とトニー賞の歴史的背景と、アジア系アメリカ人俳優協会(The Asian American Performers Action Coalition)による「上演の可視性レポート」を中心に、近年の受賞作品の背景を見てみる。

ピューリッツアー賞(Pulitzer Awards)は1917年に開始され、米国籍の劇作家によるアメリカの生活を扱い、前年に米国内で上演された演劇作品が対象とされる。審査委員は新聞・雑誌・大学・文筆家で構成され、受賞する作品は「アメリカの政治や社会、モラルの問題に関してより意識が高い」傾向があるとされる(Adler, x、谷, 10)。

一方、トニー賞(Tony Awards)は1947年に俳優で演出家のアントワネット・ペリー(Antoinette Perry, 1888-1946)の功績を称え創設され、世界で最も注目される賞の一つである。受賞資格はアメ

リカの作品に限定されず、ブロードウェイの500席以上の座席を持つ41の劇場で公演された作品が対象となる。受賞内容はピューリッツアー賞と異なり、ミュージカルと演劇部門に分かれ、最優秀作品賞から、リバイバル賞、俳優賞、演出賞、衣装賞、音響賞、振付賞等、26部門の賞が授与される。受賞式の模様はメディアで配信され、新聞や雑誌等での劇評はチケット販売を左右する。

これらの他、ニューヨーク都市圏の日刊紙、雑誌、配信ワイヤーサービスの演劇評論家が選考委員となるニューヨーク劇評家サークル賞(New York Drama Critics' Circle Awards)は、1949年に演劇業界の重要な問題を一般の人々に知ってもらうために設立された。また100名以上の会員が賞の投票を行うドラマ・デスク賞(Drama Desk Awards)や、作家、監督、俳優、活動団体等も対象に含むオフ・ブロードウェイ劇場の上演作品に授与される、1956年創設ヴィレッジ・ボイス紙主催のオービー賞(Obie Awards)等が主な賞である。

ブロードウェイは通称「グレート・ホワイト・ウェイ」(The Great White Way)と言われ、長年白人の俳優が白人の観客のために白人の物語を上演することを目的としてきたが、現在少しずつ変化が見られる傾向にある。『グレート・ホワイト・ウェイ』の著者ワレン・ホフマンによれば、黒人問題を小説化したリチャード・ライトは小説『アメリカの息子』で、人種的政治状況を逆手に取り、「ニグロの問題はない、あるのは白人の問題だけだ」と強調したが、アメリカのミュージカルにおける白人に関する研究は、その背後に人種的内容やマイノリティーの政治学が潜んでいる(Hoffman, 11)と分析する。

この問題について、アジア系アメリカ人俳優協会(以下AAPAC)は2011年ごろからNYの劇場環境に関するBIPOC(Black, Indigenous, People of Color)、つまり「黒人・先住民・有色人種化に関する調査」を独自に行い、アメリカの人口比に対して舞台上での非白人の表象が少ないことを指摘した(AAPACは、同調査の功績を評価され、2022年トニー賞特別栄誉賞を受賞)。以下、ブロードウェイの観客とスタッフの人種的構成について、

ブロードウェイ・リーグで公開されているデータと合わせて見てみる。

2016年の全米観劇者数は4700万人、2018年は3900万人と推定され（TCG）、そのうち2018年から2019年のブロードウェイの観劇者数は史上最多の1480万人とされる。そのうちブロードウェイの戯曲の観客は、8割が白人であり、とくに高所得高学歴者（81%が大卒者、41%が院卒者）である（The Broadway League 2019）。ジョン・ブッシュ・ジョーンズは「20世紀、ブロードウェイのショーの観客は誰だったか？このような人口統計は難しいが、20世紀のニューヨーク・ミュージカルの観客は19世紀末以降、一般に必ずしも極端に裕福であったわけではない白人の中流階級であった。現在チケット価格の高騰により、ブロードウェイの観客は以前の数十年よりもずっとエリート主義的になっている」（Jones, 4）と述べている。つまり、ブロードウェイ劇場は2021年の平均価格約1万5千円のチケットを支払う経済階層を対象としている。

つぎに、ニューヨークの舞台の配役における人種の割合を見てみる。2017年から2018年の白人とラテン系アメリカ人の割合は約7割（白人61.5%、ラテン系6.1%、黒人23.2%、アジア系6.9%、先住民0.2%）である。2018年から2019年は白人とラテン系が約6割（白人58.6%、ラテン系4.8%、黒人29%、アジア系6.3%・先住民0%）で、黒人が約6ポイント増加、白人の減少が見られる。しかし、2018年から2019年の「ブロードウェイ」に限定すると、約7割が白人とラテン系（65.9%、4.5%）の俳優で、黒人は24.5%と前年比からほぼ変化がない。さらに、ブロードウェイの「戯曲」の場合は、白人は約8割（白人73.5%、ラテン系4.3%）であり、黒人は17.9%である。なお、オフ・ブロードウェイにおける非白人の出演料は、白人の六分の一であるというデータもある（AAPAC 2017-8）。

さらに、舞台裏の雇用状況においては、作品の主導的地位である制作側に占める白人男性の割合が顕著である。2018年から2019年の調査では、演出家の93.8%、作家の89%、デザイナー、プロデューサーの9割、ゼネラルマネージャーの100%

が白人である。2019年に、黒人作家の割合は前年の9.6%から11.7%と約2ポイント増加したが、その他の非白人スタッフは低水準が続く（2016年、白人作家は95%、黒人作家は4.1%）。ブロードウェイのみに限定した場合、白人作家は89%、黒人・アジア系は2.7%で、戯曲に関しては、白人作家が実に95.8%を占め、ミュージカル演出家の100%が白人である。このように意思決定、資金管理、運営側の人種は、圧倒的に白人（男性）中心で構成されている（AAPAC 2018/2019）。

2020年に発表されたアカデミー映画賞の新基準では2024年までに、出演者と制作スタッフに非白人、女性、LGBTQ+を一定数含むことが審査要件とされたが、演劇界における多様性は依然として課題が多い。

2. 2000年以降の受賞作品のテーマに反映されたアメリカ社会

2000年以降の受賞作品には、具体的にどのような傾向があるかについて見ていく。19世紀半ばから現代に至るミュージカルの歴史を分析したネイサン・ハーウィッツは「同時多発テロ後のニューヨークでは、何かを深く掘り下げることなく安らぎを与えてくれるエンターテインメントが切実に求められていた」（Hurwitz, 237）と述べる。G.W.ブッシュ政権時代（2001-9年）は、2001年9月の同時多発テロと同時に愛国心が高まり、テロと悪の枢軸国とのグローバル戦争（Global War on Terrorism）に突入する。飛行機のツインタワー激突の衝撃的映像が流れ、アラブ系アメリカ人は謂れのない差別におびえ、世界中いっどこで起きるかわからないテロへの不安と緊張が高まり、10月にはアフガニスタンへの空爆が開始され、2003年になると大量破壊兵器隠蔽を根拠にイラクへ侵攻したものの、大量破壊兵器が発見されなかった事実も発覚した。また、サブプライム住宅ローンやリーマン・ブラザーズの倒産の経済危機、ハリケーンによる自然災害も続いたことから、コメディや刺激を控えた、伝統的価値観や家庭の崩壊を描く作品が受賞している。

2005年ピューリッツァー賞とトニー賞受賞のジョ

ン・パトリック・シャンリーの『ダウト、寓話』(Doubt, A Parable, 2004)は、見つからなかった戦争の大義にカトリック教会の牧師の性的虐待疑惑を重ね合わせている。2004年ピューリッツァー賞とトニー賞受賞の『アイ・アム・マイ・OWN・ワイフ』(I Am My Own Wife, 2003)は、幼い頃に父親を殺し、東ベルリンのナチス政権と共産主義政権をトランスジェンダーの異性装の女性として強かに生き抜いたドイツの古美術商のドキュメンタリー・ドラマである。2012年ピューリッツァー賞受賞キアラ・アレグリア・ウデス作『スプーンひとさじの水』(Water by the Spoonful, 2011)は、イラク戦争帰還兵で心身ともに傷を負ったプエルトリコ系アメリカ人が、イラクで民間人と接触した悪夢に悩まされている。2013年ピューリッツァー賞受賞のアヤド・アクタール作『ディスグレイスト』(Disgraced, 2012)では、同時多発テロ後、成功したイスラム系アメリカ人の弁護士が、仲間からの差別と偏見により妻も職も失い転落する。英国劇だが、2011年トニー賞受賞の『戦禍の馬』(War Horse, 2007)は、戦争中の愛馬との信頼と絆に焦点を当て、戦争における癒しを描いている。

2009年、「チェンジ」をスローガンに史上初のアフリカ系アメリカ人大統領に就任したオバマ大統領(2009年—2017年)に、人々は1863年の奴隷解放宣言後も実現されていない人種平等と社会変革変化を期待した。しかしホフマンが、「掲げた文化的・人種的な多様性の代名詞となる政権で、ブロードウェイ・ミュージカルにもある程度インクルーシブな方向性が反映されたが、白人至上主義の支配から抜け出せたかは疑問である」(Hoffman, 201)と記すように、皮肉にもオバマ政権時代では、白人警官による黒人暴力行為の画像が拡散し、警官による殺害が処罰されないケースが相次ぎ、黒人の命の軽視に抗議するBLM(Black Lives Matter)運動が広がった。

黒人問題を扱った受賞作品は21年間で12作品以上ある。とくにBLM運動が活発化した2019年以降の増加が顕著である(後述)。2002年にスーザン・ロリ＝パークスの『トップドッグ/アンダードッグ』(Topdog/Underdog, 2001)が、アフリカ系アメリカ人で女性の劇作家初のピューリッツァー

賞に輝いたことは、21世紀の多様性の幕開けを象徴している。作品は、リンカーンとブースという皮肉な名前の黒人兄弟と、彼らの社会的アイデンティティをめぐる寓話で、兄リンカーンは顔を白塗りして白人役のリンカーンを演じる薄給で生計を立て、他方、弟ブースは窃盗やカードゲーム詐欺で生きている。生計に関する兄弟の口論は、歴史の通り弟ブースによる兄リンカーン殺害という結末を迎え、果たして白人の暴力の歴史が黒人の兄弟同士の間で再生される宿命を象徴した。つぎに2011年トニー賞とピューリッツァー賞を受賞したブルース・ノリスの『クライボーン・パーク』(Clybourne Park, 2013)は、1950年代のアフリカ系アメリカ人が白人居住区に引っ越す際に直面する人種隔離時代の差別を描いた『日なたの干しぶどう』(A Raisin in the Sun, 1959)を下敷きに、現代の白人と黒人の居住区同居の問題を明らかにしている。2015年ピューリッツァー賞受賞のステイブン・アドリー・ギアギス作『リバーサイドとクレイジーの間』(Between Riverside and Crazy, 2014)は、非番時に白人警官の銃撃により重傷を負い、退職した元警官の黒人男性が、ニューヨーク・マンハッタンのアッパー・ウエスト・サイドの規定家賃の高級マンションに住んでいるが、黒人であれば警官でも誤認され撃たれる人種差別に失望する。加えて若年層の犯罪、アルコールや薬物依存症、困難な黒人アイデンティティの形成といった問題が盛り込まれた実話に基づく作品である。この3作品はブロードウェイで2022年に再演された。

その他、白人の視点ではあるものの、公民権運動の最中の1960年代初頭を背景に、オーバーサイズの女性が、黒人の友人の人種的平等の達成を目指す2003年トニー賞受賞作品『ヘアスプレー』(Hairspray, 2002)、1950年代の人種分離時代に黒人音楽を演奏した最初の白人DJを描いた2010年トニー賞受賞の『メンフィス』(Memphis, 2002)、コンゴ民主共和国の内戦中の女性の性的虐待と窮状を抉り出す2009年ピューリッツァー賞受賞の『ルーインド』(Ruined, 2008)、1964年公民権法を制定させるために尽力したジョンソン大統領を描出した2014年トニー賞受賞の『ともにとこまでも』(All the Way, 2012)など、黒人差別の意識改善を促す

物語の受賞が目立つ。

他方、白人の低賃金労働者の失業問題である「ラストベルト」(Rust Belt、さびついた工業地帯)が2000年頃より顕著になった。2015年には白人至上主義者による黒人が集う教会での銃撃事件も発生した(金成)。かつて製鉄業や製造業で栄えた経済的繁栄から取り残された白人労働者の経済・将来への不安が浮上し、「メイク・アメリカ・グレート・アゲイン」(Make America Great Again)のスローガンで支持を集めたトランプは、2017年に大統領に就任した。白人至上主義を非難しない姿勢は、トランプ支持者とトランプに抗議する反対派の衝突を生み、ラストベルトやアパラチア地方などの白人労働者たちは白人民族主義の主張を高めた。保守派擁護の機運が高まり、2015年の同性婚の合法化への批判や、通称オバマケアと言われる保険制度改革の撤回、不法移民の救済措置として設置されたDACA・DREAM法の撤廃、イスラム教徒・中国人への批判、移民を排除しアメリカを「守る」壁の建設などが叫ばれた。さらに新型コロナウイルスを中国由来と非難するアジア系へのヘイトクライムの発生、2020年5月の警官による黒人男性ジョージ・フロイド殺害事件を契機に再燃したBLMのデモといった動きの高まりから、ブロードウェイでは徐々に多様性やインクルージョンを取り入れた上演や受賞作品が増加したと言える。

ブロードウェイ上演作品の主なテーマは白人の生活で、数多くの社会問題が扱われている。2004年トニー賞受賞『アベニューQ』(Avenue Q, 2003)は、社会における人種、ジェンダー、移民に関する平等性を求めるポリティカル・コレクトネス(PC)を行き過ぎと捉えた風刺コメディである。「誰もがちょっと人種差別主義者」という楽曲で、セサミストリートのパペットに反PCのタブーを語らせ、平等性への白人の倦怠感をあらわにした。2007年ピューリッツァー賞受賞のデイビッド・リンゼイ＝アベア作『ラビッド・ホール』(Rabbit Hole, 2006)は薬物中毒で自殺した兄と、事故死した4歳の息子の死を受け入れようとする夫婦の心の傷(トラウマ)へのグリーフケアを題材としている。9.11同時多発テロ後の国民的トラウマへの心のケ

アとしても意義深い。2008年トニー賞とピューリッツァー賞受賞のトレイシー・レッツ作『8月の家族たち』(August: Osage County, 2007)は、機能不全を起こした白人一家の物語で、アルコール・病・自殺・薬物依存、近親相姦と不倫と、パンドラの箱を開けたような問題が露になる。2009年のブロードウェイ公演では、白人一家家長の母親役を黒人女優のフィリシア・ラシャドが務め、伝統的配役の慣習に一石を投じた。

2010年ピューリッツァー賞受賞『ネクスト・トゥー・ノーマル』(Next to Normal, 2008)は初の主人公が双極性障害のミュージカルで、息子を亡くした主婦の精神病と家族の葛藤、若年層の自殺、薬物乱用の問題を提示した。2011年トニー賞受賞『ブック・オブ・モルモン』(The Book of Mormon, 2011)はAIDS、飢饉、女性性器切除、地元の武将による圧政に苦しむウガンダの村の住民に対するモルモン教徒の布教とアメリカの盲目的民主主義に対する風刺である。

2014年ピューリッツァー賞受賞アニタ・ベイカーの『フリック』(The Flick, 2013)は、若者の雇用や経済的不安、自尊心喪失の倦怠感、人種間の不平等、不確かな将来への失望などについて、米国伝統の地ニューイングランドにある薄汚い映画館で働く3人の白人と黒人の低賃金従業員を中心に描いている。続いて2016年ピューリッツァー賞とトニー賞受賞『ヒューマンズ』(The Humans, 2015)は、学費の支払いに苦勞し、古い中華街のアパートに住む女性のところに、彼女の中流白人家族が訪ねてきて経済的弱者に転じたことが暴露される物語である。2017年トニー賞受賞『ディア・エヴァン・ハンセン』(Dear Evan Hansen, 2015)では若者の自殺、対人恐怖症、ネット社会における若者の孤独、家族の崩壊が明らかになる。

トランプ大統領就任の年の2017年ピューリッツァー賞受賞作品の『スウェット』(Sweat, 2015)は、ペンシルベニア州ラストベルトの白人工場労働者の苦境についてであり、2018年ピューリッツァー賞受賞『生活費：コスト・オブ・リビング』(Cost of Living, 2016)は、ブロードウェイ初の二名の障がい者たちを主人公にした劇である。四肢麻痺の白人女性を介護するのは無職の黒人男性で、裕福な

脳性麻痺の男性大学院生を介護するのは経済的弱者の優秀な移民女性の同じく大学院生である。4人の社会的対比の中にアメリカの経済格差の現実と底辺で生きる人々の葛藤、また困難を乗り越える人々の寛容さを訴えた作品である。

資本家と労働者の分断、搾取と貧困、移民問題は2019年ピューリッツァー賞とトニー賞受賞のポピュラー作品『ハデスタウン』でも鮮明に描かれる。ギリシャ神話を基に、資本家ハデスの冥界の妻となった豊穡神ペルセポネとの関係に、資本主義活動による気候変動の危機を示唆し、女性制作陣とフィリピン系等の多様性キャストの起用で新風を吹き込む切り口を提示した。2022年トニー賞受賞の『リーマン・トリロジー』(*The Lehman Trilogy*, 2012)は、史上最大規模の経営破綻で世界的な景気後退を招いた2008年投資銀行大手リーマン・ブラザーズの歴史である。ネイション誌は「リーマン・ブラザーズの隆盛を描いたこの劇は、タイトルと裏腹に、リーマン3世代にわたる銀行の成長、ひいてはアメリカの強欲な資本主義についての目まぐるしい物語だ。……勤勉さと創意工夫、移民の模範となる忍耐力で、押し車から贅沢へと上り詰めた、共感できる勇敢なアメリカ人の新入生の代表である」(Solomon)と評した。2018年にロンドンのナショナルシアターで上演後、ウエスト・エンドで大好評を博し、翌年のニューヨーク上演ではチケット価格も2000ドルにまで高騰した話題作である。これらは資本主義世界における白人の苦境とその流れを生き抜く再生力を示唆している。

次に、2000年以降の受賞作品で顕著なテーマとして同性愛やLGBTQを扱う作品が少なくとも11作品ある。2002年トニー賞受賞のエドワード・オールビー作『山羊、それともシルビアって誰?』(*The Goat, or Who Is Sylvia?*, 2000)は、自身の山羊との性的関係を暴露する一流建築家と家庭の崩壊についてだが、同性愛へのタブー視が象徴されている。2003年トニー賞受賞のリチャード・グリーンバーグ作『テイク・ミー・アウト』(*Take Me Out*, 2002)では、メジャーリーグの花形黒人選手の同性愛の暴露が、球団員と世間、とりわけ白人低所得階級出身選手やヒスパニック系の差別

感情を噴出させる。2004年、2005年の賞を席卷した『アイ・アム・マイ・オウン・ワイフ』『ダウト、寓話』は上述のように同性愛の暴露が劇構造の核心を担う。2009年エルトン・ジョンの音楽でトニー賞を受賞した2000年英映画のリメイク『ビリー・エリオット』(*Billy Elliot*, 2005)には、炭鉱労働者男性の世界における異性装少年との友愛が描かれている。同じく2005年の英映画のリメイク『キンキー・ブーツ』(*Kinky Boots*, 2012)はシンディ・ローパー作詞作曲、同性愛者のアイコン的存在ハーヴェイ・ファイアスタイン脚本でトニー賞受賞した。トランスジェンダーの体格を活かした丈夫なヒールを女性向けにリモデルし、靴工場の財政危機を救う仕立である。当時脚本家は、ノースカロライナ州で出生証明書と同じ性別の公衆トイレを使うよう求める州法「HB2法」を受け、トランスジェンダー・コミュニティへの支持を表明した。

2014年トニー賞5部門受賞の『ファン・ホーム』(*Fun Home*, 2013)は、ブロードウェイ初のレズビアンを主人公に据えたミュージカルで、1970年代ペンシルベニア州の片田舎で、同性愛者であることを隠しながら自殺した父親を大人になった同性愛の娘が追悼する記憶劇である。アリソン・ベクデルの実体験に基づくグラフィック・ノベルの舞台化で、同性愛受容の意識転換を希求する。2019年英オリヴィエ賞最優秀新劇賞、2021年トニー賞受賞し、今世代の『エンジェルス・イン・アメリカ』と称されるマシュー・ロペスの『継承：インヘリタンス』(*The Inheritance*, 2018)は1980年代から90年代のHIV/AIDS危機を乗り越えた、過去四半世紀の同性愛の文化的遺産と21世紀の同性愛の肖像に関する、2日にわたる2部構成、約7時間の壮大な同性愛の歴史劇である(Bentley)。

2001年から2022年のトニー賞最優秀作品賞、最優秀ミュージカル賞、ピューリッツァー演劇作品賞におけるテーマの傾向についてまとめてみる。2020年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響でトニー賞は未開催となり、2021年9月26日に2年ぶりのトニー賞授賞式が開催され作品賞はとりわけ注目を集めた。とくに感染拡大の影響による経済の停滞や劇場封鎖により、暗くなった人々の心を開く

目的として「喜劇」が好まれる傾向がある (Marks)。

2001年から2022年のトニー賞最優秀作品賞、最優秀ミュージカル賞、ピューリッツァー演劇作品賞の3賞における対象作品数は、22年×3=66作品-非受賞作3回=63作品となり、その中で扱われた主なテーマの割合はおよそ以下の通りである。「LGBTQ+関連」は30% (19/63)、「白人中流家族の崩壊、不調和や崩壊、白人の弱体化」は37% (23/63)、アフリカ系アメリカ人の受難、居住地域をめぐる対立」は31% (20/63)、「アメリカの同時多発テロ後の戦争・全体主義的傾向への懸念」16% (10/63)、「移民問題や存在感を増すヒスパニック系の生活」17% (11/63)、「精神疾患・障がい者」13% (8/63)、「中東・イスラム系アメリカ人への偏見」は8% (5/63)である。とくに2000年から2010年で見ると40% (12/30作品)がLGBTQ+のテーマを含んでおり、AIDS危機を背景に性的マイノリティーに関する作品が受賞したのが1990年代、同性婚の合憲が2015年であるが、2000年以降、ジェンダーの多様性の内容が受賞する傾向が高い。2010年から2022年にかけては黒人問題が33% (13/39)と増加しているが、単一テーマではなく、複合的社会問題を扱う作品が増えている。

受賞作家にも多様性の変化が見られる。「『ミュージカル監督賞』を含む受賞者の圧倒的多数は白人男性で構成されている。……トニー賞『ミュージカル監督賞』を受賞した有色人種は1人 (1992年)、『作曲賞』を受賞した有色人種は1人 (1975年)、『最優秀作品賞』の劇作家では2名 (1974年、1987年) (Low)であった。しかし、2015年には白人女性 (レズビアン)、2021年と22年トニー賞最優秀ミュージカル賞においてはじめてヒスパニック系 (LGBTQ) とアフリカ系アメリカ人男性 (LGBTQ) 作家が受賞を果たし、2022年トニー賞ノミネートは有色人種が過去最多となった。ピューリッツァー賞では女性もかなり選出され、黒人や非白人の受賞率はとくにオバマ政権後期以降82% (9/11)と顕著である。

2016年受賞『ハミルトン』(Hamilton, 2015)の大ヒットは、白人中心主義から多様性の内容、キャスティングに転換した節目となるゲーム・チェイ

ンジャーと言われる (Hoch, 29)。アメリカ建国の父、初代財務長官のアレクサンダー・ハミルトンを描いた時代劇を、非白人の俳優たちが演じ多人数国家アメリカを具現するメガヒットミュージカルとなった。演出面の多様化の例として、2007年トニー賞受賞の『春のめざめ』でのブロードウェイ初の車いすの俳優や聴覚障害者の俳優の起用や、初めて盲ろう者の観客に通訳提供するといった変化も含まれる (Hollander)。2019年に最優秀再演賞受賞の『オクラホマ!』(Oklahoma!, 1943)の再演では、アリ・ストローカーが車椅子俳優初のトニー賞を受賞した。コロナ禍を乗り越え2023年現在も上演が続く2019年トニー賞受賞の『ハデスタウン』は、女性主導の制作陣 (劇作・演出・作曲・制作) が8部門を受賞する先例となった (Noveck)。

なお、2000年から2019年にトニー賞最優秀ミュージカル賞を受賞した全20作品の「原作」の傾向として、映画が40%、オリジナル30% (Hodge, 7)であるが、ブロードウェイの上演費が高騰したため、「安全」で「簡単」に成功する有名映画がミュージカル化される傾向にある (Jones, Marks) のが実情のようである。

3. コロナ禍で躍進したアフリカ系アメリカ人による作品と受賞傾向

2019年から4年連続で黒人作家の作品がピューリッツァー賞を受賞し、2022年にはトニー賞においても黒人が受賞する快挙に沸いた。ここではアフリカ系アメリカ人の表象に関する近年の特徴について見てみる。

2012年の17歳の少年殺害事件を契機にBLM運動が始まった。SNSや個人撮影による発信技術の発展とともに、警官による武器を持たない黒人への暴力や殺害事件の情報が拡散され、黒人の命の軽視を抗議するデモ活動が活発になった。奴隷制を起源とする肌の色による差別と偏見は社会のあらゆるところに浸透し、構造的、制度的不平等の改善を訴える声がメディアでも高まった。2020年5月の警官によるジョージ・フロイド氏の暴行死事件に象徴されるように、アフリカ系アメリカ人

が不当に逮捕され投獄される確率は群を抜いている。

こうした情勢を反映し、ブロードウェイでもアフリカ系アメリカ人に関する上演が増加している。少数の20世紀の黒人をテーマにした作品は、差別や偏見に抗議する内容であった。それに対し、21世紀の作品は脱抗議型で、直接的抗議を避け、アメリカ社会において複雑に周縁化される黒人のアイデンティティを描く。テルマ・ゴールデン造語の「ポスト・ブラックネス」という概念は、公民権運動、人種隔離政策後のアフリカ系アメリカ人の人種差別を、人種の壁は存在しないと捉えるポスト・レイシャルではなく、定義することの複雑さについて言及した用語である。アフリカ系アメリカ人の演劇における黒人表現の推移を論じたジェイド・トーマスは、現代の黒人演劇は「アフリカ系アメリカ人自身が、黒人のステレオタイプ、『白人の視線』が黒人の心身に与える影響と関係、黒人の位置づけを討議し、心の内面や性質を喜劇や動画、メタテキストで表現する傾向が見られる」(Thomas, d1)と分析するが、近年の受賞作品の本質的特徴を捉えていると言える。

その他、劇場名の変更という明るい多様性の具体策も見られる。2021年8月、ブロードウェイの有力者たち(劇場の所有者、プロデューサー、労働組合のリーダー、クリエイター、キャスティングディレクター)は、業界の多様性、公平性、包摂性、アクセシビリティの強化を約束する協定(A New Deal for Broadway)に署名した。研修会やプログラムの実施、ブロードウェイの三大企業が運営する劇場の一つを黒人作家の名前に改称、スタッフの人種の多様化の強化や研修提供を約束した(Paulson 2021)。

黒字になるブロードウェイ作品は25%程度(Long)と言われ、前述のように劇場名は収益にも影響する。ブロードウェイの41の劇場のうち23の劇場はわずか3つの会社(シューベルト(Shubert)、ネーランダー(Nederlander)、ユージャムシン(Jujamcyn))が所有しており(Seymour)、ユージャムシン社だけがブロードウェイで唯一黒人の名前を冠した「オーガスト・ウィルソン劇場」を運営していた。しかし2022年3月、コート劇場が

91歳のアフリカ系アメリカ人俳優ジェームズ・アール・ジョーンズ劇場に改名を発表し(Hsu)、2022年11月、女優、歌手、公民権運動家のレナ・ホーン劇場への改名が続き、黒人女性初の劇場名、史上3つ目の黒人名の劇場が誕生した。

スーザン・ロリ＝パークスがアフリカ系アメリカ人女性初のピューリッツァー賞を受賞した2002年以来、2009年と2017年に黒人女性作家リン・ノテージが『ルーインド』『スウェット』でピューリッツァー賞を受賞し、2019年から2022年の4年間はアフリカ系アメリカ人劇作家の受賞で占められている。2019年ジャッキー・シブリーズ・ドルリーが『フェアビュー』(Fairview, 2018)にてピューリッツァー賞を受賞し、同年黒人作家ジェレミー・O・ハリスの『スレイブ・プレイ』(Slave Play, 2018)は、受賞は叶わなかったもののトニー賞12部門史上最多ノミネートの快挙を果たした。2020年はマイケル・R・ジャクソン・ミュージカル『ストレンジ・ループ』(A Strange Loop, 2019)、2021年にはカトリ・ホールの『ホット・ウィング・キング』(The Hot Wing King, 2020)、2022年には、ジェイムズ・アイジェイムズの『ファット・ハム』(Fat Ham, 2022)がピューリッツァー賞に、『ストレンジ・ループ』はトニー賞他、すべての演劇賞を制覇し、1987年以来のトニー受賞を受賞した黒人作家となった。

コロナ禍では暗いムードを吹き飛ばすようなコメディ性を有した作品が多いのも特徴的で、同様に黒人作家の作品も人種問題を皮肉な笑いに変える作品が受賞している。『フェアビュー』は一見明るく微笑ましいホームドラマに見えるが、痛烈な風刺メタ演劇で、第2幕は第1幕と全く同じ内容の黒人中流家庭の様子が演じられるが、それを白人たちが観察している。ついには客席の白人の観客が、舞台上の黒人俳優と入れ替わるよう求められ、黒人の日常生活が白人の視線にさらされている社会的構造を風刺する。ピアースはこれを、「黒人を不快にする白人の視線を不快にする」「白い視線を脱構築する」喜劇と分析している(Pearce)。『ファット・ハム』も「笑い」が評価された作品である。白人の伝統劇『ハムレット』を下敷きに、黒人なまりや特有の言語表現を用いてハムレット

の苦悩を黒人ゲイの文脈で表現していく。ノースカロライナ州の男らしさの定義に当てはまらない黒人の若いゲイ男性が、叔父や母親と家族から侮辱されながら対処する面白さが魅力となっている。ニューヨーク・タイムズ紙は「ジェームズ・アイジェームズがシェイクスピアの悲劇を黒人の男らしさとクシアネスの劇に見事に変身させた『ファット・ハム』は、『ハムレット』を反響させ、それを超越する言語を発見している」と評価した(Phillips)。ワシントンポスト紙は、「ジェームズ・アイジェームズの『ファット・ハム』はコロナ禍の厳しい状況で、『笑える』時間を劇場で共有できるすばらしさを伝えた」(Marks)とコメディ性の意義を強調している。『ホット・ウィング・キング』もホームドラマの枠組みで、南部で黒人であること、ゲイであることの意味を探る喜劇であるが、黒人性、同性愛を政治的に変革すべき苦悩としては描いておらず、「同性愛は問題ではなく自然なものとして提示されている」(Ben Brantley)。

なかでも『ストレンジ・ループ』は、黒人のゲイがミュージカルを書くという筋立ての斬新さで、2019年オフ・ブロードウェイにて称賛され、2020年のピューリッツァー賞ドラマ部門を受賞、4月にブロードウェイで公開後、6月にトニー賞最優秀ミュージカル賞に加え、最優秀ミュージカル脚本賞を受賞する快挙を達成した。『ライオン・キング』の劇場の案内係のアシャー(案内人の意味)が、「太った黒人の変態アメリカ人によるブロードウェイ・ショー!」という自嘲的歌詞とともに、社会、ジェンダー、演劇界におけるマイノリティーとしての境遇に観客を巻き込むメタシアターを展開する。登場人物はアシャーと彼の頭の中の思考を擬人化した6名の「思考たち」のコーラスとの比喩的独白一人芝居という新形態喜劇という点も特徴的である。しかし、『ストレンジ・ループ』は、314回の公演で閉幕し、これは同じく女性の同性愛者初の主人公を描いた2015年トニー賞受賞の『ファン・ホーム』の609回公演、アラブ人とイスラエル人の融和を夢想した2018年の『バンドの訪問』の624回、2019年トニー賞受賞の『ハDESTAウン』の980回(2023年3月現在上演中)、2017年トニー賞ミュージカル賞受賞の『ディア・エヴァン・ハ

ンセン』の1672回に比して短命である(Paulson)。『ストレンジ・ループ』のL・モーガン・リーが、カミングアウトした初のTGのパフォーマーとしてトニー賞にノミネートされた等、功績を残したが興行成績は伴わなかった。

史上最多のノミネートを受けながら受賞を逃したジェレミー・O・ハリスの『スレイブ・プレイ』は、喜劇的エンディングを用いず、現代の白人と黒人の性的関係に潜む奴隷制下の階層を露顕させた。また1975年のヌトザケ・シャンゲの名作、舞踏詩『死ぬことを考えた黒い女たちのために』(*for colored girls who have considered suicide / when the rainbow is enuf*, 1975)の2022年の再演は、7部門のトニー賞候補だが、開幕からわずか1ヶ月、予定より3ヶ月早く閉幕した。表題の「自殺」が敬遠された一因とニューヨーク・タイムズ紙は分析したが、特にコロナ禍では深刻な内容の作品が閉幕に追い込まれる傾向が見られる。

一方、上演が継続し評価を高めた作品も存在する。チャールズ・フラーの1981年ピューリッツァー賞受賞作品『ソルジャーズ・プレイ』(*A Soldier's Play*, 1981)の2019年の再演は、陸軍内の黒人軍曹の殺人事件を通して、黒人大尉が内面化する白人迎合思想を明らかにする悲劇だが、トニー賞最優秀リバイバル劇部門受賞、演劇部門最優秀主演男優賞を受賞した。2019年の黒人女性作家カトリ・ホルの脚本と女性演出家の手による黒人女性歌手の『ティナ・ターナー・ミュージカル』(*Tina: The Tina Turner Musical*, 2018)は、トニー賞主演女優の最優秀演技賞を受賞。また1960年代人種差別の残る南部アラバマ州で起きた、白人女性への暴行容疑にかけられた黒人男性の冤罪事件で、白人陪審員の激しい人種差別と偏見を描いた名作『アラバマ物語』(*To Kill a Mockingbird*, 2018)の2018年の舞台化作品は、BLMを背景としながらコロナ禍でも上演が継続した。黒人歌手グループ、テンプレートーションズのジューク・ボックス・ミュージカル『エイント・トゥ・プラウド』(*Ain't Too Proud*)は、2019年の開幕から2年以上上演が継続された。

その他、作品賞非受賞作品でも人種の多様化が進んだ。2020年から21年にかけて8人の黒人劇作

家の作品がブロードウェイで上演され (Tran)、2021年のコロナ禍による18か月の閉鎖後の劇場再開では、黒人作家による記録的な本数である9本の劇が上演された (Daniels)。ゲットー街での人種差別的白人警官の暴力の恐怖を描いた『パス・オーバー』(Pass Over, 2017)の劇作家は黒人女性のアントワネット・ヌワンドゥ (Antoinette Nwandu) で、黒人監督スパイク・リーが映像化。黒人牧師の葬式に大家族が集まるダグラス・ライアンの喜劇『チキン&ビスケット』(Chicken & Biscuits, 2020)、7人の男性が有色人種としての個人史を語るキーナン・スコット2世作『ある有色人種の考え』(Thoughts of a Colored Man, 2021)、トラック運転手の休憩所の黒人女性店主が、タトゥーの男性白人至上主義者を含む4人の多人種の元受刑者の従業員を、料理を通して成長させる黒人劇作家リン・ノテージの喜劇『クライドの店』(Clyde's, 2021)、同じくノテージによる黒人歌手のジューク・ボックス・ミュージカル『マイケル・ジャクソン ミュージカル』(MJ the Musical, 2021) (2022年トニー賞4部門受賞)、1955年の先駆的黒人女性作家アリス・チルドレスの反差別劇『トラブル・イン・マインド』(Trouble in Mind, 1955)の再演、そしてハイチ系黒人作家ドミニク・モリソーによるラストベルトの労働者に関する『スケルトン・クルー』(Skeleton Crew, 2022)と、有色人種の作家、非白人の俳優と内容の舞台露出が躍進した。

結論

『ハミルトン』(2016年受賞)の大成功は、「白人の建国者を黒人が演じる」歴史の書き換え (Lewis) とされる。白人の歴史的人物を、1名を除くすべての役を多様で包括的な「非白人」キャスティングで演じる試みは、白人性の偏在に対し、アメリカの多文化主義的な国民性の(再)定義を求める挑戦であった。2016年はトニー賞候補者の35%が非白人の俳優(14/40)で、2022年は48%(16/33)と、有色人種が過去最多受賞した。制作賞でも女性や有色人種が漸増し、無ジェンダー (agender)、ジェンダーを指定しないノンバイナリーの制作者たちのノミネートが注目された (VOA News)。

一方、白人の物語の多様化を快く思わない向きもある。すでに、『ハミルトン』は白人の英雄物語を非白人が永続させる問題も併せ持つとの指摘もある (Cummings)。『スレイブ・プレイ』は「白人に対する人種差別」(Yakas)と指摘されている。今まで多様に欠ける土壌に蒔かれた種が今後も成長していくかは今後の課題である。

黒人劇作家の作品は2016年頃から増加傾向にあるが、非伝統的な配役キャストを含む、多様性の試みは活発である。2014年ブロードウェイの『オペラ座の怪人』の主演に初めてアフリカ系アメリカ人の俳優ノーム・ルイスが抜擢され、2022年女性主人公クリスティーヌ役に初の黒人女性俳優が起用された。2019年の『フェリーマン』では実際妊婦の俳優が演じ、シャンゲの『死ぬことを考えた黒い女たちのために』では7人の黒人女性、聴覚障害者、妊婦の俳優を起用し、7部門のトニー賞にノミネートされた。2022年の『マクベス』では、マクベス夫人とマクダフが配役による異人種婚の設定となり、バンクォー役は女性のXジェンダーの俳優が務め、車椅子役なども設定された (Kennedy) 1949年初演の『セールスマンの死』(Death of a Salesman, 1949)は2022年オール・ブラック・キャストで再演された。

2019年にトニー賞最優秀ミュージカル賞を含む8部門を受賞した『ハデスタウン』は、ギリシャ神話を女性の自立という視点で再構築した。オルフェウスが追うエウリュディケ、ハデスと結婚するペルセポネは自ら意志を持ち、労働者を搾取するハデスの強欲さや気候変動に対して新しい価値観を提示する(行き過ぎた資本主義、自由を阻む壁はトランプの移民政策の壁を想起させる)。女性劇作と女性演出家、多様な人種配役を施した作品には最優秀ミュージカル賞を含む8つの賞が授与された。また、2022年最優秀作品受賞を含む5部門でトニー賞受賞した『リーマン三部作』は、アメリカの奴隷貿易における投資銀行の起源から、2008年金融危機を招く破産申請までのリーマン・ブラザーズの約163年間の盛衰に資本主義アメリカの姿を象徴させた。ユダヤ人移民のリーマン3兄弟役は、多様な年齢と性別の役割を演じ分けるが、黒人俳優が起用され人種・民族を考慮しない

カラー・ブランドのキャスティングを実施した。この2つの受賞作品は人種、ジェンダー、民族、宗教の壁を越えて躍進するアメリカの寛容性を感じさせる作品である。

政治や社会の動向、人種・民族のテーマが投影される演劇作品は、21世紀の米国の歩みとともに進化している。アメリカの2020年国勢調査では、白人人口が6割を切り（Jensen）、米社会の人種・民族・ジェンダーなどの多様化が進む。こうした白人の勢力の衰退、同性愛者や女性、障害などのマイノリティーの苦悩、経済格差に起因する摩擦、黒人の権利向上への活動の変化、移民問題などが受賞作品に反映され、アメリカ演劇は、いわば激動のアメリカの社会システムの綻びへの受容を映し出している。

2020年春から劇場が閉鎖したコロナ禍では、明るい喜劇が好まれる傾向があった。感染予防による経済や諸活動の停止や、ステイホームを余儀なくされた閉塞感を打破するエンターテインメント性に人々が癒しを求めた傾向もある。

必ずしも興行成績に反映されるとは限らないが、アフリカ系アメリカ人の人権の向上に関する演劇や受賞作品には多様な変化の兆しが見られる。コロナ禍による観光客の減少で地元の観客が増加したことや、総投票数の47%を獲得したトランプからバイデン大統領に移行する過程でアメリカの政治には分極化が見られ、人工妊娠中絶に反対する裁判官がトランプ大統領によって指名されるなど、アメリカが保守色へと政治的傾向を強め、黒人や有色人種、女性やジェンダー・マイノリティーの権利の保障が危ぶまれる危機感が高まった。ブロードウェイでの多様性への具体的な活動の活発化は、こうした社会情勢への応援歌と理解することができる。ジョージ・フロイド事件によって再燃したBLMや、性別を問わず過去の性暴力を告発する#MeToo運動など、暴力や抑圧に対する不服従の思潮が底流にある。

多様性や包摂性への取り組みの継続が課題であるが、白人男性中心ではない黒人の表象のほか、ジェンダー、民族の多様性は近年の受賞、配役、内容の面で確実に増加し進展してきており、加えて近年の作品は一つのテーマだけではなく複合的

問題作と言える異なる視座への寛容性と和解を求める作品が増加していることも特徴的である。

参考文献

- Adler, Thomas P. *Mirror on the Stage— The Pulitzer Plays as an Approach to American Drama*. West Lafayette: Purdue UP, 1987.
- The Asian American Performers Action Coalition. “The Visibility Report 2018-9.” <http://www.aapacnyc.org/2018-2019.html>.
- Armstrong, Linda. “‘Fat Ham’ is a succulent theatrical treat!” *New York Amsterdam News*, June 2, 2022, p22.
- Bigsby, Christopher. *Twenty-Century American Playwrights*. New York: Cambridge University Press, 2018.
- Brantley, Ben. “In ‘The Hot Wing King,’ a New Recipe for a Family.” *The New York Times*, Vol. 169 Issue 58620, March 1, 2020, p5.
- Brantley, Ben. “‘The Inheritance’ Review: So Many Men, So Much Time.” *The New York Times*, Vol. 169 Issue 58515, Nov. 18, 2019, pp.1-5.
- The Broadway League. “The Demographics Of The Broadway Audience” for 2018-2019 Season.” <https://www.broadwayleague.com/press/press-releases/the-broadway-league-reveals-the-demographics-of-the-broadway-audience-for-2018-2019-season/>.
- Cummings, Emi P. “Unpopular Opinion: Color-Blind Casting Isn’t ‘Woke’ — It’s Racist.” December 9, 2020, <https://www.thecrimson.com/article/2020/12/9/unpop-opinion-color-blind-casting/>.
- Hodge, Matthew. “21st-Century Broadway Musicals and the ‘Best Musical’ Tony Award: Trends and Impact.” *Arts*, 9, (2) 58, 2020, pp. 1-17.
- Daniels, Karu F. “The Great White Way is still too white, Black Broadway stars and advocates say.” *New York Daily News*, Jun 11, 2022, <https://www.nydailynews.com/snyde/ny-broadway-diversity-audiences-audra-mcdonald-marcia-pendelton-20220610-cwjvmounsfh37iwhocrx>

- quphoq-story.html.
- Hoffman, Warren. *The Great White Way*. Rutgers UP, 2020.
- Hollander, Sophia. "Awakening the Senses on Broadway." *The Wall Street Journal*, Dec. 14, 2015, <https://www.wsj.com/articles/awakening-the-senses-on-broadway-1450136087>.
- Hsu, Cindy. "Broadway theater to be named after legendary James Earl Jones." *CBS NEW YORK*, March 2, 2022.
- Hurwitz, Nathan. *A History of the American Musical Theatre*. Routledge, 2014.
- Jensen, Eric, Nicholas Jones, Megan Rabe, Beverly Pratt, Lauren Medina, Kimberly Orozco and Lindsay Spell. "2020 U.S. Population More Racially and Ethnically Diverse Than Measured in 2010." *United States Census Bureau*, August 12, 2021, <https://www.census.gov/library/stories/2021/08/2020-united-states-population-more-racially-ethnically-diverse-than-2010.html>.
- Hoch, Danny. *American Theatre*. Vol. 32 Issue 7, September 1, 2015, p28-29.
- Jones, John Bush. *Our Musicals, Ourselves: A Social History of the American Musical Theatre*. New Hampshire: Brandeis UP, 2003.
- Kennedy, Mark. "On Broadway, More Visibility, Yes, But Also an Unseen Threat-Diversity on Broadway is blooming and growing, but COVID-19 has other plans." *NBC New York*, June 6, 2022.
- Lewis, Helen. "Straight outta Congress." *New Statesman*, Vol. 146 Issue 5395, December 1, 2017, p44-48.
- Long, Heather. "Investing in Broadway: How We Actually Made Money." *CNN Business*, 2016, <https://money.cnn.com/2016/06/11/investing/fun-home-broadway-investors/index.html>.
- Low, Jason. "The Diversity Gap In The Tony Awards, 1982–2015." *Lee & Low Books*, June 7, 2016, <https://blog.leeandlow.com/2016/06/07/tony-awards-diversity-gap-infographic/>.
- Marks, Peter. "To revive us, we need plays like the Pulitzer-winning 'Fat Ham'." *Washington Post*, May 26, 2022.
- Noveck, Jocelyn. "'Hadestown' and Diversity Big Winners at 2019 Tony Awards." *The Christian Science Monitor*, June 10, 2019, <https://www.csmonitor.com/The-Culture/2019/0610/Hadestown-and-diversity-big-winners-at-2019-Tony-Awards>.
- Paulson, Michael. "Broadway Power Brokers Pledge Diversity Changes as Theaters Reopen." *The New York Times*, August 23, 2021.
- Paulson, Michael. "Private Data Shows Broadway's Hits and Misses After Reopening." *The New York Times*, January 31, 2022.
- Pearce, Michael. "Making Whiteness Visible and Felt in Fairview." *Humanities*. University of Exeter, 2021, 10(2), 81.
- Phillips, Maya. "'Fat Ham' Review: Dismantling Shakespeare to Liberate a Gay Black 'Hamlet'." *The New York Times*, May 26, 2022.
- Seymour, Lee. "Broadway Investors Set To Lose \$100 Million As A Dozen Shows Close." *Forbes*, July 11, 2019, <https://www.forbes.com/sites/leeseymour/2019/07/11/investors-set-to-lose-100-million-as-broadwayundergoes-huge-market-correction>.
- Solomon, Alisa. "The Lehman Trilogy's theater of financial malfeasance." *Nation*. January 26, 2022, <https://www.thenation.com/article/culture/lehman-trilogy/>. TCG. *Theatre Facts 2018*, http://www.tcg.org/pdfs/tools/TCG_TheatreFacts_2018.pdf.
- Thomas, Jade. "From Freakshow to Sitcom: Metatheatrical (Dis)Continuities in Contemporary African American Plays." *Journal for Literary and Intermedial Crossings*, 6.2, 2021, d1-24.
- Tran, Diep. "This Broadway Season Features a Record 8 Black Playwrights — But Is It a Fluke?" *Backstage*, October 15, 2021, <https://www.backstage.com/magazine/article/broadway-record-breaking-season-black-artists-74121/>.
- VOA News. "On Broadway, More Visibility, But Also an Unseen Threat." June 6, 2022, <https://www>

voanews.com/a/on-broadway-more-visibility-but-also-an-unseen-threat-/6606255.html.

Yakas, Ben. “Woman Interrupts ‘Slave Play’ Q&A To Complain The Show Is ‘Racist Against White People.’” *Gothamist*, December 3, 2019, <https://gothamist.com/arts-entertainment/woman-interrupts-slave-play-q-complain-show-racist-against-white-people>.

Warne, R.T. ““I Hope I Get It”: Impact of Tony Award nominations and wins on Broadway production longevity,” *Arts and the Market*, Vol. 8 No. 1, May 6, 2018, pp. 30-46.

谷 佐保子 「トニー賞、ピューリッツアー賞受賞作品から眺める現代アメリカ社会——一九九〇年代以降のアメリカ社会と演劇」『現代演劇Vol. 21 — トニー賞・ピューリッツアー賞』現代演劇研究会 2015年。

金成 隆一 『記者、ラストベルトに住む—トランプ王国、冷めぬ熱狂』朝日出版社 2018年。